

氏名	宮坂 直樹
ヨミガナ	ミヤサカ ナオキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第501号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 観照の円滑な転換 〈作品〉 C V

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小沢 剛
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松尾 大
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小谷 元彦
（副査）	女子美術大学	教授		杉田 敦

（論文内容の要旨）

鑑賞ではなく観照の語を題目に据えたのは、作品の良し悪しを判断し、作者の心情や作品の背景を探るという意味を除外した作品享受の経験を研究主題とするためである。本論の要は、「観照の円滑な転換」を観者に促すための作品構成についての研究であり、著者は本研究を、「観照についての基礎的な研究」に位置づけている。まず、観照についての基礎的な研究を行うに至った経緯を記述し、次に「観照の円滑な転換」の具体的な内容に踏み込んでいく。章ごとの構成は以下の通りである。

第一章では本研究の足がかりとして、美術領域における「作者」と「観者」の二項に着目する。近代芸術の発生によりこれらの項が強調されたことを指摘し、美術史における作者の項と観者の項それぞれに対する批評的な試みを取り上げて分析する。作者の項に対しての批評的な試みとしてマルセル・デュシャンの「レディ・メイド」、ロバート・ラウシェンバーグの「消されたデ・クーニング」、「超芸術トマソン」を挙げる。観者の項に対しての批評的な試みとして「参加型作品」を例に挙げる。ここで参加型作品における「参加する観者」と「俯瞰する観者」の二重の観者を見出し、参加型作品が見る行為の対象になり得るのではないかと提起する。また、ウンベルト・エーコの動的作品の概念における、作者と観者、作品の生産と享受の流動的な在り方を参照して章を締めくくる。

第二章では、俯瞰する観者が参加型作品を見ることについて考察する。見るという行為を、建築学者であるクリスチャン・ノルベルグ＝シュルツによる空間の分類の参照を通して考察し、本論における「観照」の語について詳しく説明する。

第三章では、「基礎科学」と「応用科学」の関係、「純粹美術」と「応用美術」の関係に着目し、前章までに論じた観照の視点から、本論の目的を「観照についての基礎的な研究」と定めると定める。また、「観照についての基礎的な研究」が応用された例として「インテリアとしてのカラーフィールド絵画」と「アルフォンス・ロランシックの拷問施設」を挙げる。

第四章では、クレメント・グリーンバーグのメディウム・スペシフィシティと、これに連なるメディウムについての論考から、本研究の主題である観照に関わる要素を抽出する。グリーンバーグのメディウム・スペシフィシティ、スタンリー・カヴェルによる映画の物理的基盤の考察、ディック・ヒギンズのインターメディアといった一連の論考から、作品における「観照の組織の方法」に着目する。この観照の組織の方法の一つとして、本論の題目である「観照の円滑な転換」を提案する。さらにゲシュタルト心理学において頻繁に用いられる「図と地の分化」、「図地転換図形」の作用を参照し、二章で参照したノルベルグ＝シュルツの空間概念と接続することで、観照を円滑に転換する条件を提示する。図地転換図形が同一の空間の中の異なる形態の間での観照の転換であるならば、本論で論じる観照の円滑な転換とは、同一の形態を対象として異

なる空間の間を観照が転換することである。本章で参照する図と地に関しては、視覚の先行研究を主とするが、本研究の潜在的な射程が視覚だけに留まらず、他の知覚や記憶、想像、思考などの抽象的处理にまで及ぶ可能性を示すために、様々な分野の図と地の研究、言語学の概念である転換子についても触れる。

第五章では、本論で論じた内容と、著者の制作との関係を記述していく。著者の作品で用いる視覚的空間の画角と体性感覚的空間の形態について、様々なアーティストや建築家の作品を引用して説明する。また、著者の作品である「CV」、「surspace」、「死角」を紹介する。

(論文審査結果の要旨)

本論文の目的は、視覚と体性感覚が交代しあう筆者の作品を記述、説明するために、藝術作品を見つめる作用としての「観照」が、一つのあり方から別のあり方に移行するという現象についての理論を構築することである。そのために筆者は周到な順序で理論の構築を行っている。

まず第一章において筆者は、観照の語は対象と距離をとって見つめるという意味を響かせるので、観者が作者と共創するタイプの芸術実践にそぐわないのではないかと、という予想される批判に対し、そのような場合でも、対象と自分の絡み合いという関係性を対象化して見つめる、いわばメタレベルで観照作用が働いていると反論する。

第二章では、一次レベルの観照と二次レベルの観照の違いの説明のために、ノルベルグ＝シュルツによる空間の分類を利用する。つまり直接的空間を一次の観照に、抽象的空間を二次の観照に相関させる。

第三章では、本論文が基礎的研究であるからといって、実作への適用が閉ざされているわけではないことを、カラーフィールド絵画とアルフォンソ・ロランシックの拷問施設という二つの例を引いて実証する。

第四章で筆者は先ず、複数のメディアに関するヒギンズのインターメディア理論を、観照のあり方は作品のメディアムによって組織されるという自己の洞察から、複数の観照の融合理論と解釈する。次いで、視覚に傾く観照と聴覚に傾く観照とが交代しあう映画に即して、作者が観者の観照を操作しうることが可能であると述べる。最後に、その操作の手法を考える手がかりとして図地転換図形を用いる。つまり図と地の反転を、一つの観照から別の観照へと交代する現象のモデルとして機能させる。

第五章は、先行する諸章で構築された理論を自作に関係づける。例えばCVという作品では、地面に投射される映像の枠が視覚に、映像を覗き込むように見る動作が体性感覚に関わるが、前者が一次の、後者が二次の観照と見なされる。

以上のように構成される本論文は、確かに、理論自体としても、自作への適用についても、問題を残していないわけではない。理論自体としては、図地転換図形における図と地が同一の感覚領域に属するのに対して、観照の交代は異なる感覚領域間で生ずるというように、必要な区別が必ずしも明確になされていない。自作への適用についても、理論のすべての部分が円滑に自作を説明するという機能を果たしているとはいえない。例えばノルベルグ＝シュルツによる空間の分類と、筆者による空間の分類(視覚的空間と体性感覚的空間)とは一致していないが、そのことの理論的調整が見当たらない。

しかしながら、主題に関与的な多くの理論を選択・消化・結合して、観照の転換という現象を説明する整合的、統一的理論を構築した力量は、卓越した理論的思索力を十分に証明している。それゆえ博士学位にふさわしい論文と判断しうる。

(作品審査結果の要旨)

宮坂の博士提出作品は、主に木を使用した巨大な4角錐的な構造体で、上部の集約点あたりにプロジェクターが設置され、柱の内側で囲まれた床面の下方へ向け、画像投影が可能な装置となっている。上方から床面への投影装置自体は特に珍しいものではない。また「観照の円滑な転換」という論文と作品との間に接続がスムーズに結びついていないところもあることも認められる。しかし、フランク・ステラのシェイプトキャンバスなどの図像(描画内容)と構造の主従関係は、提出作品のプロジェクションされた放射状の光のかたちとそのかたちに合わせた四角錐の柱がネガポジの構造を持っていることになぞらえることが出来る。荒

川修作やリチャード・セラの作品のように人間の身体と強く交わる構造を持ち、体勢と視覚が不安定な関係を保って体験を促す作品などは、床面の映像全体の把握が四角錐の基礎辺となる柱によって妨げられ、映像の視認に不安定な体勢を装置から要求されることもその繋がりと考えられる。以上より、宮坂が考える「鑑賞」から美学的な「観照」への転換される作品サンプルと提出作品との間には「反転」というキーワードをもとにして関連性を見いだす事が出来るため、作品と論文の間に生じた隙間を補完していると考えられる。

口述試問で宮坂が言及していたが、提出作品には、美術作品として残されていく映像アーカイブの未来の展示方法の危うさを指摘しようと考えていたようだ。今回の作品で、宮坂はこの構造体から投射する映像を世界の様々なアーティストに協力を依頼し、提供してもらっている。なぜ協力を依頼したのかという理由については、美術作品の多くはインストラクションが残されているのだが、将来的に映像作品の場合、それらの指示書が無視されて（間違えて）公開されてしまうかもしれないと仮定したためだ。そこで宮坂は自作の統一した投射システムは、多くの映像が一様にアーカイブ的にフラットに扱われていく可能性を含んでいる。つまり、この建築的構造体は作品として単体で強い自立性を持っているのではなく、他者の作品を取り込むことで自立しはじめ、構造と図像の主従関係を反転させる契機となる「機能」をもつ装置として考えることが出来るだろう。その「機能」とは、ルビンの盃の黒と白の境界線のようなものだ。宮坂の過去の作品に見られる物理的ネガとポジの反転を超えて、今作品は「観照」という言葉をキーワードに美術の映像作品の保存や展示方法の価値の反転まで捉えようと試みたことは評価できる。作者の主観性を排除し、映像作品がただ「観照」されるものとなるときの（仮想的ではあるが）プラットフォームの出現が必要であることを考えた宮坂直樹の提出作品は、博士号の取得にふさわしい作品として判定できる。

（総合審査結果の要旨）

宮坂直樹君は、彫刻や、建築やメディアアートを学ぶ中、作家や鑑賞者の知覚外にある美術作品の鑑賞についての興味を広げてきた。そしてリサーチや制作を通し、様々な領域を横断した末に作った作品のために、「観照」という言葉を選んだ。

近代以降の美術でことさら語られるように、作者と観者の二項に着目し、デュシャンやラウシェンバーグの作品を引き合いに出し、説明した。さらにリレーショナルアートや、インタラクティブアートなどのような参加型作品も観照の語の対象になり得ると提起する。それには、クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツによる空間の分類を利用して説明している。

次に、この論文の目的を基礎的な研究と定めながらも、実用の可能性を説明した。さらに、複数のメディアウム・スペシフィシティに関する論考から観照のあり方を洞察し、観照の組織の方法を捉え、観照を円滑に転換する条件を提示した。

「CV」と名付けた作品は、4本の巨大な支柱で四角錐に組み立てられ、上部から床面に垂直に投影する装置になっている。この名の由来はフランス語のCinema Verticalとのことだが、言葉の通り、鑑賞者は上から覗きこむ構造になっている。その構造は映像を壁面から開放し、かつ上下関係さえも開放している。また、俯瞰を促す見せ方もコンセプトの成立に大きく関与している。しかしながら論考と作品との関係が素直に接続できるように見えるには、いささか調整不足であると問題点は残る。

論文ではあらゆる文献を読み込み得た多くのピースを、精密かつダイナミックに理論を組み上げた。それは新たな見解を示しており、高い評価を得た。作品もあらゆる映像作品のプラットフォームのあり方と大きな可能性を示している。これらはともに博士号と評価する。